

Eureka V

六年制通信 No. 3 平成 29 年 4 月 21 日 (金) 号

GW の読書計画を立てましょう

読書計画については前にも書いたかもしれませんが、Truth stands repetition. ですからね。もう一度書きます。

ある人との出会いが大きな転機となる、といったことが人生にはあります。恩師との出会い、友人との出会い。それらによって、「私はどういうものに心惹かれる人間なのか」を自覚することがあります。自分を知るというのは、実はそういうことです。自分が何に惹かれ何を嫌悪するかを知ること、これが自分を知ることです。そういった、自分に影響を与えてくれる人との出会いはもう君たちも経験しているかもしれませんね。同じことが本についても言えます。本の中の人物に影響を受けることも非常に多いと思います。特に若いうちに訪れるさまざまな出会いは大きな意味を持ちます。いい影響ばかりとは言えないでしょうが、若者の素直な資質は最終的には自分のためになるものを見抜いていくと思います。だから、たくさん本を読んでさまざまな影響を受けるがいい、そう言いたいですね。

人との出会いでも書物との出会いでも、実は大切なのは時期なのです。聖書にもあるように「すべてのことに時がある」のです。これは心得ておかないといけないことで、求めているときに出会えるかどうかということは極めて重要なことです。学生時代に同じ先生に習っていても影響を受ける人もいればそうでない人もいるわけで、例えば君たちが全員同じ時期に同じ本を読んでも感じ方は全く異なることがあります。感動する人もいればつまらないと思う人もいるわけです。これは個人の資質もありますが、つまらないと思った人も一年前に読んでいたら、あるいは二年後に読んだとしたら猛烈に影響を受けるといったことがあります。つまり時期の問題が大きいのです。再読するとよくわかります。私自身、学生時代に感動して読んだ本を今読んでも、あの時の感激は決して味わえないでしょうし、また昔は全く面白くなかったのに今読んで大変感動した本もあります。現実は何冊もあります。どの時期に出会うかということは、とても重要なことです。

いつ何を読めばいいのか、これは個人差があって自分で考えるしかないのですが、わかっているのは、読み続けていなければその出会いのチャンスを持つことすらできないということです。ですから、極端に言えば何でもいいから多感な青春時代になるべく多くの書物に触れてほしいと思うのです。私の経験では、若いときに読んだ本は概ね感動できます。感性が瑞々しいのでしょうね。うらやましい限りです。ですから

読んだ人の感想や書評に左右される必要はありません。自分の感性を大切に、これはよいと感じる作家を求めることですね。

作家の中にも一人の作家あるいは作品を愛し続ける人があります。遠藤周作に『私の愛した小説』という本がありますが、これは全編モーリヤックの『テレーズ・ドスケルー』について書かれています。遠藤さんはこの作品を、自分が作家として進む道を示してくれた本として愛しぬいています。どれほど愛してきたかを一冊の本に書いているのです。私は『テレーズ…』自体には感動しませんでした（でも今読んだらまたきっと違うかもしれませんが）、遠藤さんの感動ぶりに心を打たれました。ちなみに『テレーズ…』の翻訳は新潮文庫に出っていますが、失礼ながら遠藤さん自身の訳出したもの（これは講談社文芸文庫だったかな）に比べれば、かなり見劣りがします。やっぱり好きな人が訳さないとダメですね。

そういえば外国語の作品は訳者によってずいぶんと趣の違う、言ってしまえば別の作品になるくらいの影響がありますから注意が必要です。一人称を『私は』とするか、『僕は』あるいは『俺は』とするかだけでもずいぶん違ってきますからね。思い出しましたが、昔、学生時代に『推理小説の誤訳』という本を読んだのですが、その中にこんな話がありました。ある高名な翻訳家の訳に「ハエよ。全てはあらわになった」というのがあって仰天した、と。そりゃ驚きますよ、突然ハエに話しかけているのですから。原文は“Fly! All was discovered.”です。つまり「逃げろ。全ては露見した」ですね。flyには確かにハエという意味もありますけど、あんまりひどいではないですか。ね、怖いでしょ。訳本に関しては定評のある訳者のを選ぶべきですね。

さて、先ほどのテレーズは薄い本で、ほんの数時間あれば誰にでも読めます。また、たいていの本は毎日30分、1時間と読めば数日で読めるでしょう。つまり読書の習慣を持てば数日で読める本は多いと思います。エッセイなんか、すぐですよ。しかしせつかくのGWですからね。もう少し大きな読書計画を立ててみてはいかがでしょう。吉川英治の大河小説（例えば『三国志』とか）や司馬遼太郎の『坂本竜馬』や『坂の上の雲』のような、文庫本で6冊7冊8冊とあるようなものは一気に読んでみないと面白みがわかりません。あるいは薄い本でもじっくりと咀嚼しながら読まないといけない類の本も、この際じっくりと時間をかけて挑んでみてはいかがでしょう。古典と呼ばれる本がそうですね。パスカルの『パンセ』、プラトンの『ソクラテスの弁明』、ホメロスの『イーリアス』（こういう、音読した方が絶対にいい本を読んでほしいなあ）とか、あるいはいつそのこと絶対に一回読んだだけでは分からないと言われているベルグソンの『物質と記憶』とか。わからなくても構わないのですよ。長い時間を経てなお、残っている作品は本物です。それらはこれまでに多くの人の心に残ってきた作品ばかりです。若い君たちも少し背伸びをして、そういう作品にじっくり取り組む時間があってもいいではないですか。今の自分には分からない、という発見も貴重なものですから。一日くらい徹夜したっていいじゃないですか。

ただし、受験生の諸君は、今はダメですよ。念のため。学生時代にたっぷり読めばいいですから。